南詔国後半期の対外遠征と国家構造

林 謙 一 郎

【要約】 本稿は南詔国後半期（七九四—九〇二）の唐との関係の検討を通じて、これまで不明の点が多かった南詔国の対外遠征の動機、および歴史的背景を明らかにし、ひるがえって南詔国の国家構造、および後半期におけるその変化について考察するものである。南詔国は王族蒙氏を含む有力氏族の一種の連合政権であり、その中で唐との関係、すなわち南詔王への冊封、および吐蕃に対する共同作戦から得られる利益が蒙氏の優位を支えていた。しかし吐蕃の衰退により、九世紀中葉にはこの関係は破綻した。南詔国は唐の領域へ大規模な侵攻を行ったが、それは冊封を拒否した唐の行為への抵抗であると同時に、帝号を称して唐と対等の関係を結ぼうとする南詔王の示威行動でもあった。また、ヴェトナム北部への侵攻に際しては東部の昆明盆地を根拠とする有力氏族の成長をうかがうことができる。対外遠征の終息後、九世紀の末には南詔王の權威は低下し、昆明盆地の勢力を中心に雲南地方内の秩序は再編されつつあった。

史林 七五巻四号 一九九二年七月

はじめに

南詔国はその後半期、すなわち九世紀中葉—後半においてさかんに外世界に対する進出を行っている。この中では現在のビルマ北部に存在したとされる驛国に対するものが東南アジア古代史上で以前から問題にされてきたが、中国中原王朝、すなわち唐に対するものが、その規模からみても、また唐末反乱の動向に与えた影響の大きさからいっても最も重視されるべきものである。しかしながら、これについては、その経過の概略、および唐の辺境官吏の横暴が南詔国の侵入をひき起こしたという史料の記述が紹介される以外、南詔国側からの検討はほとんど行われてこなかった^①。本稿はこれらを含む

八世紀中葉―九世紀の南詔国の対外活動を具体的に検討し、それらを通じて南詔国の国家構造、政権の性格といったものを把握することをめざしたものである。また南詔国の後継政権である大理国は基本的に南詔国後半期の体制・構造を継承したとの見解が一般的であるが、このような理解の妥当性も問題となるところである。

第一節では前稿^①において論じた反唐帰蕃までの南詔国の成立過程について簡単に振り返った後、それに続く八世紀末の再帰唐の結果確立された唐―南詔国関係の性格、およびそこから導きだされる南詔国国内の構造について述べる。次に第二節においてこのような関係の九世紀中葉における変質を指摘した後、第三節において九世紀後半の唐に対する軍事行動について、主に成都と安南都護府の二方面に対する行動の比較検討を通じて、その動機、および南詔国成立以前を含む歴史的背景について考察する。最後に、雲南地方の前近代史上における南詔国の位置づけ、および大理国への継承関係についても触れたいと思う。

① 概説的な記述は向達『蛮書校注』(中華書局、一九六二年)、徐嘉瑞『大理古代文化史稿』(香港・三聯書店、一九七八年)、林旅芝『南詔大理国史』(台北・各大書局、一九八一・一九八四年)、王吉林『唐代南詔与唐關係之研究』(台北・聯鳴文化有限公司、一九八二年)、Charles Baucus, *The Nan-shao Kingdom and Tang China's southwestern frontier*, Cambridge Univ. Press, 1981. などによるものとができる。また中国では南詔国を奴隸制国家とらえるか、封建制国家とらえるかという議論と関連してこれに対する言及がある(張

鴻昌「南詔史研究総述」『雲南省社会科学院歴史研究所集刊』一九八八一、五三一―六八頁。

② 藤沢義美「南詔国の支配階層」(『西南中国民族史の研究』、大安、一九六九)三二七―三三八頁。武内剛「南詔・大理国の国家構造に関する一考察」『立命館史学』一一、一九九〇。

③ 拙稿「南詔国の成立」『東洋史研究』四九―一、一九九〇。以下「前稿」と略称。

一 九世紀初頭の唐―南詔国関係

(一) 南詔国の再帰唐

前稿において筆者は、八世紀における唐の対雲南政策の変転が南詔王蒙氏の勃興をもたらしたことを述べた。以下若干

の補足を交えつつ当時の状況について再論する。

玄宗開元年間―天宝年間の前半にかけて、唐はそれまでの羈縻体制を破棄し、武力による雲南地方への直接進出を行った。それは、開元年間には明らかに、同地方への吐蕃勢力の浸透に対抗するものであった。また吐蕃に帰属して反唐的傾向を強める大理盆地周辺の諸民族集団に対する牽制の意味をも含んでいた。

ところが、四川西部の安戎城を中心とする吐蕃との抗争が激化すると、唐は雲南地方で唯一親唐的勢力であった蒙氏（当時の王は皮羅閣）に雲南王の称号を許し、これを利用して側面の安定をはかった。これに伴い蒙氏は大理盆地周辺の諸勢力を傘下に収め、雲南西部を代表する政権へと成長した。

つぎに安戎城の奪還を果たし、吐蕃との戦局が安定すると、唐はふたたび雲南地方への武力進出を企図した。これは成都から昆明盆地に至り、さらに紅河ぞいに南下して安南都護府の置かれていた現在のヴェトナム北部に至るルート（歩頭路）の開通をめざしたものである。これに関しては実際の推進役であった劍南節度使章仇兼瓊・鮮于仲通、およびこれと結びつきの深い楊国忠が南海交易へのアクセスをもくろんだ可能性があることを前稿でも指摘した。この動きによって、蒙氏と並立する勢力であった昆明盆地の爨氏は混乱のうちに蒙氏に併呑された。そして天宝九載（七五〇）の張虔陀事件を契機に、蒙氏が唐に反抗し、吐蕃と結ぶことによってこの時期の唐の対雲南政策は破局を迎えたのであった。

さて、本稿で扱うのはこのうち、安史の大乱、吐蕃の長安入城という混乱をへて、唐が再び雲南地方をかえりみる八世紀末以降の唐―南詔国関係である。

吐蕃に帰属していた時期の南詔国内の情勢については、『南詔徳化碑』^①の断片的な記述以外に史料がなく、不明の点が多い（『徳化碑』の記事は贊普鍾十四年（永泰元年、七六五）で終わっている）。次に南詔国が史料上に現れるのは貞元三十四年ごろであり、このころ南詔国は吐蕃の庄政に苦しみ、ひそかに唐に帰順する意志を伝えてきている。^② これを受けて劍南西川節度使韋皋は四川南部の少数民族を仲介として、雲南地方の情報を収集しつつあった。^③

これと前後して唐中央では宰相となった李泌が吐蕃に対抗する戦略を献策している。これは『通鑑』貞元三年九月に

上曰「回紇則既和矣、所以招雲南・大食・天竺奈何。」対曰「回紇和、則吐蕃已不敢輕犯塞矣。次招雲南、則是斷吐蕃之右臂也。雲南自漢以來臣屬中國、楊國忠無故授之使叛、臣于吐蕃、苦於吐蕃賦役重、未嘗一日不思復為唐臣也。大食在西域為最強、自葱嶺、

居西海、地幾半天下、与天竺皆慕中國、代与吐蕃為仇、臣故知其可招也。」
とあるように、仇敵とみなされるウイグルとさえ敢えて和を結び、さらに雲南・インド方面を味方に引き入れることによって吐蕃をチベット高原に封じ込めようという大胆なものであった。韋皋の南詔国に対する招諭も、このような中央の意向を受けてのものであったはずである。

これらの唐側の政策は貞元十年(七九四)に南詔国の再帰唐という形で実をむすぶ。異牟尋は唐から南詔王に封じられ、金印を授けられた^④。この時点で唐は蒙氏―南詔国を雲南地方の王として認知し、吐蕃と対抗しうる、唐にとっての防衛線の役割を南詔国に期待したわけである。八世紀中葉に皮羅閣や閣羅鳳に与えられた「雲南王」の称号が雲南地方内の反唐的集団の鎮圧を期待したものであったの^⑤と比べると、蒙氏に対する位置づけがかなり変わってきていることに注意せねばならない。

これより唐と南詔国の、成都―大理盆地を結ぶルートが正式に開通する。南詔国はこのルートを通してさかんに唐への朝貢を行っている。南詔国の朝貢遣使に関する記録は史書に散在しているが、これをまとめたものが表1である。表1では史料に記される年・月をそのまま採ったため、例えばある年の年末の記事と翌年正月の記事とは同一の使節とみなさねばならないなどの問題がある、しかしそれを考慮しても『旧唐書』南蛮伝に

― 比年遣使来朝、或年内二三至者。

と記されているのが誇張とはいえないほど、頻繁に遣使が行われていることがわかる。

吐蕃に対する牽制という意味もあって、唐は南詔国との関係をとくに重視しなければならなかった。連年の朝貢を受け

表1 南詔国の唐に対する朝貢活動

年	月 (出典)	年	月 (出典)
開元22(734)	3(朝, 褒)	元和12(817)	12(朝)
天宝 7(748)	(朝)	13(818)	4(会)
貞元10(794)	4(褒)	14(819)	1(褒)
	9(朝, 褒)		11(褒)
11(795)	4(朝, 褒, 会)		12(褒)
12(796)	12(朝)	15(820)	是年(朝)
14(798)	12(朝, 会)	長慶 3(823)	9(朝)
18(802)	1(朝)	宝曆 2(826)	1(朝)
	12(朝)	3(827)	(旧)(2月改元)
19(803)	1(褒, 褒, 会)	太和元(827)	11(褒, 旧)
20(804)	(旧)	2(828)	1(褒)
永貞元(805)	11(朝, 会)		12(褒)
元和元(806)	8(朝)	3(829)	12(朝)(11月に成都攻撃)
2(807)	8(褒, 会, 旧)	4(830)	12(朝)
	12(朝, 会)	5(831)	11(朝)
3(808)	11(会, 旧)(告異牟尋死)	6(832)	1(褒)
4(809)	1(褒)	7(833)	1(褒)
	12(朝)	8(834)	1(朝, 褒)
7(812)	1(褒)	開成元(836)	12(朝)
	10(旧)	2(837)	1(褒)
	12(会)		12(朝)
	是年(朝)	3(838)	2(褒)
8(813)	12(褒)	4(839)	1(褒)
10(815)	1(褒)		閏1(朝)
	11(朝)	5(840)	(朝)
	12(褒)		12(褒)
11(816)	1(褒)	会昌 2(842)	1(会)
	5(褒, 旧)(報勅龍盛死)	6(846)	1(朝, 褒)
	12(朝)	大中 8(854)	2(会)

出典 朝：『冊府元龜』朝貢四・五(巻971-972) 会：『唐会要』南詔蛮(巻99)
 褒：『冊府元龜』褒異二・三(巻975-976) 旧：『旧唐書』南蛮伝(巻147)

てゆく必要がある。以下項を改めて論じたい。

入れるのみならず、南詔国の有力者の子弟を継続的に成都に留学生として受け入れる、といったことも行われていた。また、朝貢使に付随して成都まで赴いて交易活動を行うもの数も少なくなかったという。⑥

また、このように連年遣使を行うということは、この関係が南詔国の側にとっても極めて重要であったことを示しているといつてよい。これについては、賜与・交易といった目先の利益のみならず、南詔国内の支配構造の点から見

(二) 南詔国の基本的支配構造

前稿でも述べたように、八世紀中葉、成立当初の南詔国は、洱海南方を出身地とする有力氏族（史料では西洱河蛮と呼ばれる）がそれぞれの兵を率い、「大軍将」「軍将」などの称号をもって蒙氏のもとに統合されたものであった。天宝九載（七五〇）の反唐帰蕃、およびその後数年の戦闘により雲南地方から唐勢力を追い払うことに成功した南詔王閣羅鳳は、同時に雲南西部に進出し、尋傳蛮・裸形蛮などこの地方の住民を勢力下においた。また、広徳二年（七六四）には長子鳳伽異を昆明盆地に送り、柘東城を建設するとともに、昆明盆地の旧爨氏勢力二十万戸を雲南西部の永昌盆地（保山県）に強制移住させた^⑧。このようにして、吐蕃服属期に南詔国の国内体制は次第に整備され、八世紀の末までには『蛮書』『新唐書』南蛮伝（以下『南蛮伝』と略す）上などに記されているような、清平官（≡宰相）六名、大軍将一二名を頂点とする官制、六（十）險（≡州）・六節度・二都督を柱とする国内統治体制ができあがった^⑨。

南詔国の実質的な支配圏はほぼ現在の雲南省中央部であり、その主要構成民族（支配の対象となった民族）は西洱河蛮をはじめとする白蛮系の盆地に住む民であった^⑩。したがって、自然条件を考えても南詔国の雲南支配はいわゆる「点と線」、すなわち昆明盆地および洱海南方の、現在の弥渡・祥雲・巍山などの盆地を中心として周辺に散在する盆地群と、それら盆地を結ぶルートの支配という形にならざるをえなかった。そのため南詔国は畿内である大理盆地以外の最重要拠点に六節度を、それに準ずる地には都督を設置した。そして六節度には、清平官に次ぐ進宰相級の高官である大軍将を配置したのである^⑪。

しかし、大部分西洱河蛮の有力氏族から構成される大軍将を、軍権をともなうて地方の要地に送ることは、南詔国にとって常に支配層の在地化・分権化の危険性をはらむものであった。南詔王たる蒙氏はこれに対して歯止めをかける必要があったといえる。だからこそ、大軍将は十二名のうち半数の六名が地方に出、半数は中央に残されていたのであり、史料^⑫

には明記されていないものの当然定期的な配置替えが行われたと考えるべきである。

また蒙氏は大理盆地一帯を統一した時点で出身地である蒙舍川（巍山県）を離れ、洱海西岸の狭隘な盆地へ本拠を移す。^④ ここには洱海南端の位置に龍口城、北端に龍尾城があり、さらにその内側に、大和城・大蓋城に挟まれる形で、最終的に首都として建設された陽苴咩城が存在する。洱海西岸は確かに雲南西部の要地であるが、交通路の結節点という意味では現在の大理市（下関）に当たる龍口城がその中心であろうし、農業生産の面では比較的広い巍山や、さらに広大な祥雲・弥渡の盆地が圧倒的に有利なことはない。したがって南詔国の首都の立地はすぐれて政治的・軍事的なものといわねばならない。

この地において、蒙氏のもとに清平官・大軍將が集まり、南詔国の中央政府を構成していた。このことは、見方を変えればこれらの重臣が政治的・軍事的に最も影響力を行使しうる彼らの出身地⇨洱海南方の盆地群から引き離されていたことを意味する。南詔国軍も『蛮書』や『南蛮伝』の記載にしたがうかぎり、当初の私兵の寄せ集めのものから、戦時に指導者ごと徴発されるにすぎない周辺民族を除いて、少なくともその中核においては国軍としての編成が行われたようである。^⑤ そしてその兵力の主要なリソースであり、農業生産の点からも重要な洱海南方の盆地群には、賧という節度とは別系統の組織による統治体制が敷かれていた。^⑥

つまり、理念的には南詔国の国家体制は、支配階層の在地化・分権化に向かう要因をはらみながらも、巧妙にそれを回避する方向で組み立てられていたとすることができる。しかし現実には白蛮系の有力氏族が大きな力を持つ傾向は避けられなかったであろうし、兵制にしても彼らの私兵的性格がどこまで払拭されたかには疑問の余地がある。

このような国内の状況を踏まえたうえで再帰唐が南詔国にとって持つ意味を考えると、まず唐による南詔王への冊封により、蒙氏の権威が一段と高まることはいうまでもない。外世界の大権力の承認によって王が権威を高めるという図式は、いわゆる周辺国家においては常套的ともいえる。また、勃興以前の蒙氏と唐との結びつき、および西洱河蛮系の有

力氏族と吐蕃との結びつきを考えると、蒙氏にとってはどうしても最終的に外権力Ⅱ唐である必要があった。

また唐との交渉は、朝貢およびそれに付随する交易活動をはじめとして、南詔国にさまざまな利益をもたらすものであった。河西回廊の重要性とは比べるべくもないとはいえ、やはり雲南地方は、中国と西方を結ぶルートのひとつである。しかしこれに関しては、あくまでもこのルートの東側の終端が四川および長安という大市場に通じていることが大前提である。それがいったん冊封―朝貢という図式で開かれたとき、中国の伝統的国家観からすれば基本的に南詔国Ⅱ蒙氏であり、蒙氏を介在せずに他の有力氏族がこれらの利益を直接得ることは事実上不可能になった。蒙氏は唐との交渉によって得られる経済的な利益を他の有力氏族に分配する能力を示すことによっても、有力氏族連合の中での自らの権威を高めることができたのである。

このように、再帰唐はとくに蒙氏にとって有利な条件をもたらすものだった。いいかえれば、蒙氏を中心とする国家としての南詔国の凝集力を高めるといふ意味が、この関係には認められよう。南詔王異牟尋は、南詔国が雲南地方諸地域に勢力を伸長し、諸制度の整備がほぼ完成された八世紀末という時点で、あらためて唐との緊密な関係を求めた。それはいわば右に述べたような国内体制を補完する働きをもつものであり、これをもって南詔国の支配構造の、いちおうの完成をみたといふことができる。その意味では、天宝九載の反唐帰蕃と同様、再帰唐も南詔国にとって一時期を画するものであった。

南詔国の再帰唐は決して中国西南部に平和をもたらしものではなかった。貞元十年から、唐と南詔国はただちに吐蕃に對する共同作戦を開始する。貞元十年、十一年、十五年、十七年と継続して行われた吐蕃との戦闘の中で、南詔国は雲南北部の鉄橋城・昆明城を吐蕃から奪い、敵對勢力を破っていった。

この中で目を引くのは吐蕃およびこれを頼る敵對勢力の支配下にあった順蛮・磨蛮・爨人・河蛮などを昆明盆地に強制移住させていることである。^⑦吐蕃との戦闘は雲南西北部における支配権を確立するためだけでなく、このような、いわば

人口の獲得という目的をもあわせ持ったものであることがわかる。

この時点では、強制移住は明らかに爨氏勢力を永昌盆地に徙したことで空荒となった昆明盆地の回復を目的としたものである。^⑮しかし、南詔国後半期の対外遠征に関する史料には、ほとんどのに捕虜を雲南地方へ連れ帰ったとの記述が見出される。太和三年（八二九）の成都攻撃の際は数万人を雲南へ連行しているし、咸通年間の交州侵攻に関しては「所殺捕且十五万人」とされている。^⑯太和年間の東南アジア方面への遠征に際しても、弥臣国・弥諾国から二千人、驃国から三千人と規模は小さいながら、やはり住民を雲南地方へ連れ帰っている。^⑰

この時代、すなわち数世紀後に大量の漢民族が流入してくる以前の雲南地方は、同じ時期の東南アジアの山地部などと同様、人口のかなり疎な地域であったと考えられる。既に述べたように、南詔国による雲南支配とは盆地とそれを結ぶルート^⑱の把握であり、支配階層を構成するのは洱海南方出身の白蛮系有力氏族であった。南詔国の勢力範囲が拡大するにつれてこれらの支配階層も雲南地方各地へ広がっていった。そして、支配の安定をはかるためには、盆地空間における生産力の確保、何より農業生産に従事する人口の確保が非常に重要な問題であったにちがいない。南詔国が吐蕃との交戦を皮切りに、八七〇年代に至るまで断続的に対外遠征を繰り返していく原因のひとつとして、このような人的資源確保の必要性を挙げられよう。南詔国が軍事遠征によって人的資源を獲得し、それを支配階層内に分配するという機能を持っていたがゆえに、成都や安南都護府、はては東南アジア方面にまで進出する必要があったのではないだろうか。

南詔国の再帰唐も、吐蕃との交戦を正当化し、唐軍と共同することで雲南地方北部での活動を有利に進めることを可能にしたという一面があったことは否定できない。八世紀末には南詔国は雲南地方の主要部を勢力下におさめ、支配階層の拡散が始まっていた。そこでまず獲得すべき人的資源として、吐蕃に押さえられていた北部の人口に注目するのは当然である。このような視点から見ても、この時期に南詔国が唐との関係を求める必要があったことは十分納得されよう。

要約すると、本節では南詔国の再帰唐について、(1)唐側の要因(対吐蕃政策上の必要性)、(2)支配構造上の必要性(爨氏

の権威強化)、(3)人的資源獲得の必要性、という三点を明らかにした。このうち第一点に關しては佐藤長氏²⁾や藤澤義美氏³⁾によっても指摘されているとおりであるが、南詔国側の事情については従来、史料に書かれている「吐蕃の重臣に苦しむ」ということ、および北部の対立勢力の打倒、という以外の理由づけがされていなかった。

以下この二点、すなわち蒙氏の権威強化、人的資源の獲得という観点から南詔国後半期の対外活動について考察を進めていきたい。

- ① 『金石萃編』卷一六〇(以下『徳化碑』と略称)。
- ② 『新唐書』卷二二中南蛮伝中(以下『南蛮伝』と略称)、『資治通鑑』(以下『通鑑』と略称)貞元三年正月・貞元四年五月。以下『通鑑』の参照箇所のみを示すが、対応する記事はおおむね『南蛮伝』中にも見出すことができる。
- ③ 『通鑑』貞元三年閏五月。
- ④ 『通鑑』貞元十年正月・六月。
- ⑤ 『通鑑』開元二年九月。前稿参照。
- ⑥ 『通鑑』大中十三年二月(第二節第二項に引用)。
- ⑦ 『徳化碑』。
- ⑧ 『蛮書』卷四。
- ⑨ 『蛮書』卷九・『南蛮伝』上。『蛮書』の官制諸制度と『南蛮伝』上のそれとの相異(六險と十險、六節度の相異など)はそれぞれの原史料の成立時期の違いを反映している。『蛮書』がおもに貞元十年の冊立南詔使である袁滋の『雲南記』にもとづくものであるのに対し、『新唐書』は乾符六年に善闡城に赴いた徐雲虔の『南詔録』に拠るものとされる。方国瑜『雲南史料目錄概説』(中華書局、一九八四)七一―七六、一五一―一六三、一六四―一六八頁。
- ⑩ 前稿九二―一〇〇頁。
- ⑪ 『蛮書』卷六「雲南・柘東・永昌・甯北・鎮西及開南・銀生等七城、則有大軍將領之、亦称節度。」(『蛮書』の引用は『蛮書校注』による)。
- ⑫ 『蛮書』卷九「大軍將一十二人、与清平官同列。每日見南詔議事。出則領要書城鎮、称節度。有事跡功勞殊尤者、得除授清平官。」
- ⑬ 蒙氏が大和城に本拠を移したのは皮羅閣が洱海西岸を制圧した開元二五年(七三七)、『蛮書』卷五。陽直岬城への遷都は大曆一四年(七七九)、『通鑑』。藤沢前掲書、四七四―四九一頁。
- ⑭ 『蛮書』卷九「每家有定壯、皆定为馬軍、各掘邑居遠近、分為四軍。以旗旛色別其東西南北、每面置一將、或管千人、或五百人。四軍又置一軍將之。」『南蛮伝』上「百家有總佐一、千家有治人官一、万家有都督一。」同「大府主將曰演習、副曰演覽。中府主將曰總衛、副曰總覽。下府主將曰澆酋、副曰澆覽。小府主將曰幕搗、副曰幕覽。府有陀西、若管記。有陀西、若判官。」
- ⑮ 『蛮書』卷四。『南蛮伝』上。
- ⑯ 『通鑑』永隆元年七月。
- ⑰ 『蛮書』卷四。
- ⑱ 藤沢前掲書、四三三―四六四頁。
- ⑲ 『通鑑』太和三年二月。
- ⑳ 『通鑑』咸通四年正月。

② 『蛮書』卷十。

③ 佐藤長『古代チベット史研究』下巻（東洋史研究会、一九五九）、六

六八一—六八六頁。

④ 藤沢前掲書、三〇六一—三〇四頁。

二 唐—南詔国関係の変質

(一) 王嵯巔の成都侵攻

永貞元年（八〇五）に韋皋、元和三年（八〇八）に異牟尋と、南詔国再帰唐の立役者が相次いで没して以後も、しばらくの間この関係には変化がなかった。しかし太和三年（八二九）十一月には南詔軍が成都に入寇し、その外郭を破って十日間城内を制圧するという事件が起こった。

唐側では西川節度使杜元穎が軍事的に無能であり、しかも辺境の戍卒を圧迫して私腹をこやしていたことが、兵卒が郷導となつて南詔軍を誘いこむ原因となつた。^① 国交回復後三十年を経て、国境線の緊張感が失われていたところに、このような人物の入り込む隙があった。

南詔国の側では、異牟尋の子の尋閣勸が王位を継いだか、健康に問題があったのか、わずか一年で没する。^② 次にその子勸龍盛が立ったが、即位の七年後、彼は「淫逆不道」の故をもって弄棟節度王嵯巔によつて殺害された。^③ 王嵯巔は勸龍盛の弟勸利盛を擁立して南詔国中央における実権を掌握する。

成都侵攻に先立つこと六年、長慶三年（八二三）にはすでに勸龍盛の弟豊祐が即位している。しかし、成都への出兵に關しては王嵯巔が主導していたらしい。『通鑑』太和三年十一月には

南詔自嵯巔謀大举入寇。

とあるし、侵攻軍そのものも彼に率いられていることが諸史料に明言されている。^④

貞元十七年（八〇二）以降、吐蕃に対する唐および南詔国の大規模な軍事行動は伝えられておらず、南詔国にとっては新

たに人的資源獲得の必要性が高まっていたものと思われる。『通鑑』元和十五年（八二〇）十二月には

西川奏南詔二万人入界、請討吐蕃。

という記事があり、南詔国は吐蕃に対する共同作戦の再開を要求しているのである。ところが、当時唐と吐蕃は盟誓の準備を進めており、^⑤当然ながらこの要求を受け入れることは不可能であった。成都から引き揚げる際に数万人を雲南地方へ連行している^⑥ことから考えても、この成都攻撃が人口の獲得を目的とするものであることは明らかであるように思われる。

成都侵攻が南詔王ではなく王嵯巔に主導されたという事実は非常に示唆的である。人的資源獲得の必要性、西川節度使の無道を理由に挙げるとしても、この時点で唐に敵対することは蒙氏にとっては暴挙であるといわざるをえないからである。前節で見たような国内構造からすれば、蒙氏の権威は南詔王という地位ないし機構によって支えられるというよりも、むしろ唐という外権力からの権威付与、および唐との関係をはじめとする対外活動から得られる経済的利益を分配する、という王自身の能力によって裏づけられる面が大きいと考えられる。また、その利益の中には唐と共同して吐蕃を攻撃することに由来する人口の獲得も含まれるとみなしてよいだろう。在位一年で没した尋閣勅、「淫逆不道」の勅龍盛と、二代続いて南詔王はこのような能力を欠いていた。また、唐側の事情によるとはいえ、吐蕃に対する軍事行動も継続することができなかった。このような状況が王嵯巔による実権の掌握を可能にしたのである。そして、唐との関係による権威の強化などとは無縁な王嵯巔によって、成都攻撃が敢行されたのであった。

しかし、それがただちに蒙氏の王統が没落することに通じると考えるのは誤りである。たしかに王嵯巔は南詔王を廃立し、成都攻撃を主導するほどの力を發揮している。しかし、豊祐が東南アジア遠征などを通じて本来の能力を發揮すると（豊祐に関しては史料に「超敢、善用其衆」という評価がなされている^⑦）、南詔王の権威は再び回復されたものと考えられる。豊祐の治世は三〇年以上の長きにわたる。そして、成都攻撃以後は王嵯巔およびその子孫とみなされる人物が南詔国に関する唐宋代の史料に姿を表すことはない。また、南詔国の唐に対する朝貢活動が豊祐の死に至るまで依然として継続されて

⑧ いることもこれを証するものであろう。

(二) 冊封—朝貢体制の崩壊

王嵯巔の成都攻撃は八世紀末に結ばれた唐—南詔国間の関係が次第にうまく機能しなくなってきたことを示している。この両国間の関係は、元来伝統的な中華思想に基づく冊封関係であると同時に、共同して吐蕃と戦うための同盟とでもいべき側面があった。成都から南詔軍が引き揚げた後、唐は李徳裕を西川節度使として起用し、四川南部の防衛体制の再編を行う^⑨。これは軍中の土地に詳しい人間から情報を收拾し、雲南地方との連絡ルート^⑩の地図を作成することから始まる徹底的なものであり、これによって当分のあいだ四川南部の辺境は安定を回復した。だが、これによって唐は同盟国であるはずの南詔国に対する防衛を固めたわけであり、両国間の関係は明らかに変質しはじめていた。

南詔国は成都攻撃以後も朝貢活動を継続しているとはいえ、このような傾向が次第に顕在化していくことは避けることができなかった。『通鑑』大中一三年(八五九)二月には次のような記事がある。

初、韋皋在西川、開青溪道以通群蛮、使由蜀入貢。又選群蛮子弟聚之成都、教以書數、欲以慰悅羈縻之、業成則去、復以他子弟繼之。如是五十年、群蛮子弟學於成都者殆以千數、軍府頗厭於粟給。又、蛮使入貢、利於賜与、所從僉人浸多、杜悰為西川節度使、奏請節減其數、詔從之。南詔豊祐怒、其賀冬使者留表付嶺州而還。又索習學子弟、移牒不遜、自是入貢不時、頗擾邊境。会宣宗崩、遣中使告哀、時南詔豊祐適卒、子酋龍立、怒曰「我国亦有喪、朝廷不弔祭。又詔書乃賜故王。」遂置使者於外館、礼遇甚薄。使者還、具以狀聞。上以酋龍不遣使來告喪、又名近玄宗諱、遂不行冊礼。酋龍乃自称皇帝、国号大礼、改元建極、遣兵陷播州。

韋皋によって定められた唐の南詔国に対する基本路線は、ここで完全に放棄されたのである。この時期にはもはや、成都では韋皋によって始められた南詔国に対する優遇措置を過大なものと感じて、その削減を朝廷に訴え、中央でもこれを

認めたのである。

このような唐の南詔国に対する態度の変化をもたらした原因は南詔国自体よりもむしろ唐―吐蕃関係の変化にあった。佐藤長氏によると、前節で述べたような李泌による唐の吐蕃封じ込め政策は確実に効を奏し、九世紀に入ると吐蕃は対外的に孤立状態におちいった。そして、長慶元―二年（八二二―二）にはついに唐との間に会盟が行われた^⑩。これは前後数回にわたる唐―吐蕃間の会盟の最後のものである。以後两国間には和親関係が樹立され、それは吐蕃が崩壊するまで再び破られることはなかった。南詔国の成都入寇を招いた杜元穎の兵力削減も、結果的に彼に責任をかぶせることになってはいるものの、時期的にみれば、唐―吐蕃関係が緊張緩和の時代に入ったことを反映しているといつてよいであろう。長慶の会盟以降、吐蕃の勢力は王位継承に関する混乱などもあって低下の一途をたどり、九世紀中頃には実質上このチベット古代王朝は崩壊する。つまり、右に引いた『通鑑』の記事の時点ではすでに、唐が南詔国を重視せねばならなかった前提条件そのものが消滅してしまっているのである。

この記事の後半で唐は豊祐の後を継いで立った南詔王世隆（倉龍）の冊封を拒否している。その理由として挙げられているのは、王の名が玄宗の諱を犯すという点である。しかしそれはむしろ、自らも内部にさまざまな問題を抱えつつあった唐が、既に用済みとなった南詔国を切り捨てようとしていることにはかならないのである。

そして、南詔国側のこれに対する対応は世隆の帝号自称、建元という形で表れている。尋閣勸の頃からすでに「驃信」という王号を称してはいたが、ここで皇帝を自称したのはそれとはまったく意味合いが異なると考えなければならぬ。この後、咸通七年には成都に赴いた南詔国の清平官董成が節度使に対し抗礼を要求して囚われる、という事件が起こっているし、一連の唐に対する軍事侵攻収束後も南詔王は唐に対して臣を称することを頑なに拒否している^⑪。したがって、これは決して一時的なものではなく、南詔国の唐に対する方針が根本的に変化したものとみなさねばならない。南詔国、より正確に言えば南詔王世隆は冊封―朝貢という従来の唐との関係を断ち切って、対等の立場で唐と対しようとしたことが、

これらの事実からうかがえるであろう。

このような唐との関係の根本的な変質を通じて、九世紀後半には、南詔国内の諸制度にかなりの変革が行われたことが史料からうかがえる。^⑬ また、南詔王という地位の持つ性格自体も、否応なしに変化していかねばならなかった。

従来の研究においても、南詔国の後半期に、王権に何らかの変化が起こったという指摘はしばしば行われてきた。そこでは、蒙氏の軍事的支配が優越していた前半期に対し、後半期には蒙氏の絶対的支配が後退し、それに代わるものとして白蛮系の有力氏族が台頭してくる、というのが通常の見解であった。日本においては南詔国に関する歴史的研究の開拓者である藤澤義美氏が最初にこれに触れているが、氏は後半期を具体的に扱っておらず、諸史料から南詔国の官名・人名を収拾した南詔国の官制および支配階層の構成に関する研究からの見通しを述べているにすぎない。^⑭

近年武内剛氏は南詔国後半期および大理国時代に関する研究を行っているが、後半期には南詔王は宗教的（仏教的）權威を身にまとい、実権を伴わない、いわば統合のシンボルとして機能していたとされている。^⑮ あるいは南詔王と周辺民族との個人的な主従関係を利用して、軍事活動にともなう兵員徴発などの際に、白蛮系の有力氏族に利用される立場であったという。^⑯

両氏が白蛮系有力氏族の台頭を述べる根拠としているように思われるのは、王嵯巔による勸龍盛殺害、および南詔国後半期に関する史料中に白蛮系の重臣ともみなされる人物の名がめだつことである。王嵯巔に関しては、たしかに彼が実権を掌握していた時期があることは認められるが、それが必ずしも蒙氏の王権衰退傾向と結びつかないことは前項でも述べた。また、白蛮系重臣については軍事侵攻を通じて南詔国との直接的な交渉が増加したこと、また史料がこれを大きく扱っていることから南詔国の使者等の個々の人名が把握できるようになったにすぎないということもできる。

また、両氏を含め、南詔国史に関する史料としてしばしば利用されてきた『南詔野史』にも問題がある。この書物はいわば南詔国前半期に関する『南詔徳化碑』に対応するものとして、特に南詔国後半期の雲南側史料として用いられてきた。

しかしいうまでもなく『南詔野史』は明代・清代の編纂物であり、南詔国時代の史料としては『蛮書』『南蛮伝』などにくらべ数段価値の劣るものといわざるをえない。同書の南詔国に関する記述は大理国時代、および元朝支配下の段氏聯管の時期を経てきており、随所にその影響を見いだすことができる。またテキスト間の相違もかなり大きく、南詔国滅亡後数百年を経てかなり史伝に混乱が生じている。例えば武内氏が段氏の台頭を示す事件として引用している段宗勝による王嵯巔殺害にしても、版本によっては豊祐の死の直後ではなく勸利盛の死の直後に述べている。また『南詔野史』と同系統の史料である『夔古通記浅述』¹⁸⁾にいたっては同じ事件をまったく別の金縉なる人物の事跡として述べている。同書がむしろ『南詔野史』の原本の一つであると考えられることからすれば、『南詔野史』が大理国段氏の出自を称揚するために伝承を改変している可能性が高い¹⁹⁾。後節でも同様の例を指摘するが、これらを見ても、白蛮有力氏族、特に南詔国の後継政権を樹立した楊氏・段氏らの勃興を示す史料として『南詔野史』を使用することには困難がともなうのである。

前稿でも述べたように、南詔国内における白蛮系の有力氏族の地位は成立当初から非常に高いものであった。だがそれが後半期、とくに豊祐・世隆の時期においては蒙氏を凌駕するほどの力をもっていたとすることはいま一つ問題が多いのである。また、従来の研究においては世隆による帝号自称、その後の唐に対する軍事遠征という二つの大きな事件が視野に収められていない。

世隆は帝号を自称した直後に播州（貴州省遵義市）を攻撃し、その後も彼の時代はほとんど唐に対する軍事遠征に明け暮れることになる。次節でも示すように、その全てを世隆自身が直接主導したわけではない。だが、

魯龍年少嗜殺戮、親戚異己者皆斬、兵出無寧歲、諸國更離忿、屢覆衆、國耗虛。

と『南蛮伝』下にあるように、全体的に見ると世隆自身も反対勢力を押し切ってまでこれを推進しているといつてよい。

唐との関係の悪化は、蒙氏の南詔王としての地位そのものをゆるがしかねない事件であった。冊封を拒否されたことは蒙氏の権威の裏づけとなる要素のひとつが失われ、各地における有力氏族の在地化に歯止めを掛ける力が弱まることを意

味するからである。また朝貢活動が停止したことによって、蒙氏は従来のようにそこから得られる経済的な利益を分配することで自らの權威を高めることも不可能になった。

しかし見方を変えれば、唐との君臣關係を放棄することによって、唐の領域から人的資源を調達することには何の問題もなくなったということもできる。安南都護府(交趾城)襲撃を通じて多くの捕虜を得ていることからみれば、これ以後の唐に対する軍事遠征がこのような一面を持つことは確かだろう。遠征に際して雲南地方各地の民族の動員を行うことは、彼らに対する南詔王の支配力を確認することにもつながる。また捕虜の獲得を通じて、南詔王は利益の分配者というみずからの機能を全うすることが可能である。したがって国内的にみれば、対外遠征はそれまでの朝貢活動の代替としての機能を果たしているという位置づけが可能なのではないだろうか。

いっぽう対外的には、これらの遠征は明らかに唐との交渉を有利な方向へ進めるためのものであろう。これまでの歴史的経緯や、雲南地方の置かれた位置から考えて、南詔国が唐と全く關係を持たない、あるいは収奪の対象とのみ考えられるのは不可能に近い。そこで冊封を拒否された世隆以後、抗礼事件が示すように、南詔国は対等の立場で唐と交渉を進めることを指向するようになる。しかしそれを可能にするためには、前世紀の吐蕃のごとく、みずからが唐にとって大きな脅威になりうることを示す必要があったのである。とくに成都への侵攻に関しては、そのような、いわば示威行動としての意味を想定することができるだろう。

冊封拒否―世隆の帝号自称―唐に対する軍事遠征という三つの事件を一連のものともみなしてその意味を考えようとするかぎり、少なくとも世隆の時期には象徴と化した南詔王の姿を見出すことは困難である。しかし次の隆舜(法)の時代になると事情が変わってくる。対外遠征が成功であったかどうかに関して、それを領土拡張を目的とするものと考えない限り、単純に評価することはできない。しかしそれを通じて、南詔国の国力が大きく消耗したのは事実であった。

先に引いた史料からもわかるように、唐との冊封朝貢關係の破棄、相次ぐ対外遠征の断行といった政策には反対するも

のも多かったらしい。世隆の時期にはまだそれを押し切って遠征を強行するだけの力を南詔王は持っていたのである。しかし世隆の死後、隆舜が年少で即位すると、南詔国の国政は権臣の手によって動かされるようになったことが唐宋時代の史料にも述べられている。^⑩「其俗尚浮屠法」として高僧が仏僧を南詔国に送り込むのもまさに隆舜の時代であることは、この時期における南詔王の仏教への傾斜を示すものである。また、南詔国末期の史料であるとされる『南詔国巻』^⑫には確かに、仏教的権威を身にまとった隆舜の姿が描かれているのである。したがって、武内氏のいうような南詔王の変質は、むしろ世隆期の対外遠征の結果として、隆舜の時代になって生じたものなのではないだろうか。そしてその原因としては、度重なる遠征が、実際の軍事行動を担う白蛮有力族の発言権を増大させることにつながったということが予想される。だがその前に、実際の軍事遠征に関する史料を詳細に検討する必要がある。

- ① 『通鑑』太和三年二月～二月。
- ② 『通鑑』元和四年二月。
- ③ 『通鑑』元和一年二月。
- ④ 『通鑑』太和三年二月「曩嶺自邛州引兵徑抵成蜀。」「南蛮伝」中「曩嶺乃悉衆掩邛・戎・嵩三州、陷之。」
- ⑤ 佐藤前掲書、六八六～六九九頁。
- ⑥ 「蛮留成都西郭十日、其始慰撫蜀人、市肆安堵、将行、乃大掠子女・百工数万人及珍货而去。」『通鑑』太和三年二月。
- ⑦ 『通鑑』長慶三年七月。
- ⑧ 表1参照。
- ⑨ 『通鑑』太和四年一〇月、五年八月。
- ⑩ 佐藤前掲書（本節註⑥）。
- ⑪ 『通鑑』咸通一〇年一〇月。
- ⑫ 『通鑑』乾符五年四月、六年二月。
- ⑬ 『蛮書』卷九「近年已来、南蛮更添職名不少。」

- ⑭ 藤沢前掲書、四三三～四三五頁。
- ⑮ 武内剛「雲南社会における統合と宗教」『行動と文化』一一、一九八七年、四五～四七頁。
- ⑯ 武内前掲論文、九〇～九七頁。
- ⑰ 『南詔野史』原本は明・倪略撰とされるが、現在一般に用いられているのは明・楊慎編輯、清・胡蔚訂正の乾隆四〇年石印本である（ただし木片『南詔野史会証』（雲南人民出版社、一九九〇年）は楊慎の本書への関与に懐疑的である）。以下本稿では右の胡蔚増訂本を単に『南詔野史』と記す。
- ⑱ 尤中『樊古通記浅述校注』雲南人民出版社、一九八八年。
- ⑲ 段宗勝の名自体は『文苑英華』卷四七〇所収の「封敕 与南詔曹平官書」にある。
- ⑳ 世隆死後のことであるが、南詔国は唐との講和の後に公主を迎えることを強く要求している（『通鑑』中和二年七月、三年七月）。このような点からみても、南詔国が吐蕃の前例を意識していた可能性がみと

められるのではないだろうか。

② 『南蛮伝』中「法年少、好畋獵甜逸、衣絳紫錦罽、鍍金帶。围事顯
洪大臣。」

② 李霖燦『南詔大理国新資料的綜合研究』中央研究院民族学研究所專
刊九、一九六七年。

三 对唐遠征の具体的検討

本節では、九世紀後半の南詔国の唐に対する軍事遠征を中心とする活動に対して、右に述べたような枠組みが妥当性を
持つものであるかどうかを検討したい。まず、その概略を表2に示した。

九世紀後半の南詔国の対外遠征がほぼ世隆の時期に集中していることは既に述べたとおりであるが、表2からは、その
中で安南都護府を中心とする現在のヴェトナム北部への攻撃と、嶺州(四川省西昌市)・成都を中心とする四川方面の攻撃と
には時期のずれがあることがわかる。また、唐側においては安南都護(静海軍節度使)^①および西川節度使として高駢が非常
に大きな役割を果たしており、交趾城を回復し、また成都に迫る南詔軍を最終的に撃退したのも彼の功績であった。

この中で特に検討する必要があるのはヴェトナム北部方面への攻撃の実態である。成都への攻撃に関しては、過去の朝
貢使節や成都への留学経験者が支配階層内に多くいたことから、様々な情報が容易に得られたことは想像に難くない。ま
た建国の時期から南詔国と唐との交渉はもっぱら成都經由で行われており、唐への攻撃を示威行動とみなす場合、それは
まず成都に向けて行われると考えるのが当然であろう。また王嵯巔の先例もあり、雲南地方から見ても近い人口密集地
である四川を狙ったという見方もできる。

ところが実際には先にヴェトナム北部への攻撃が行われているのである。安南都護府を通じた南詔国と唐との交渉とい
うのは、唐に帰順する意志を韋皋に伝えるため、異牟尋が戎州・黔州・安南の三路を通じて同時に使者を送った、とい
うこと以外、軍事侵攻以前にほとんど例が見られない。また史料においては安南都護の横暴に反抗する周辺民族が南詔軍を
呼び込んだという理由づけがされているため、あたかも南詔国がこれに乗じて領土拡張をめざした軍事遠征を行ったかの

表2 南詔国の対外遠征

	劍南西川方面		安南都護府方面	
太和 3(829)	成都	11月 王嵯巔		
太和 5(831)	嵩州	10月		
太和 6(832)			劫掠驛国	
太和 9(835)			破弥臣国・弥諾国	
会昌 6(846)			安南	9月
大中12(858)			安南	1月・6月
大中13(859)			播州	(年末にあり)
咸通 1-2 (860-61)			安南	12月 段會遷 (12月 攻陥交趾, 861.6 奪還)
咸通 2(861)	嵩州	7月	邕州	7月
咸通 3(862)			安南	2月 楊思縉(善闡節度使) 楊忠義(柘東判官)
咸通 4(863)			嵩州	(12月-864・正月)
咸通 5(864)	7月	兩林鬼主邀南詔蛮敗之		
咸通 6(865)	嵩州	(5月)		
咸通 7(866)	清平官董成等詣成都			
咸通10(869)	遣使者楊會慶			
咸通10-11 (869-70)	成都	10月 南詔王魯龍 杜元忠(坦綽) 870. 1月 至成都城下(-2月)		
咸通14(873)	西川 黔南			
乾符 1-2 (874-75)	成都	11月 坦綽 875. 1 高駘, 西川節度使に		
乾符 3(876)	遣使者詣高駘求和, 而盜辺不息		閩2月 遣使段達宝(陝西)	
乾符 4(877)				
乾符 5(878)	4月	遣使趙宗政(清平官・魯望)		

・繫年は『資治通鑑』による(弥臣・弥諾・驛国については『蛮書』巻十)。

ような印象を与える。

しかも史料中に表れる人名から、実際には南詔王以外の勢力がこれを主導しているという可能性も指摘されている。^②ここではまず、四川方面での活動も含め、これらの対外活動に関して主体になった人物、ないしは勢力について検討してみたいと思う。

(一) 主導者の問題

南詔国によるヴェトナム北部への侵攻はまず会昌六年(八四六)の安南都護府攻撃に始まる。これについては、『通鑑』は単に「蛮寇安南」とするが、『新唐書』本紀では「雲南蛮」となっている。^③ただしそれ以上の詳細は不明である。

次の大中十二年(八五八)からのヴェトナム北部への侵攻については、大中七—九年(八五三—五)に都護であった李涿の安南都護府周辺の民族に対する横暴が入寇の原因として挙げられている。『通鑑』大中十二年六月には

峯州有林西原、旧有防冬兵六千、其旁七縮洞蛮、其酋長曰李由独、常助中国戍守、輸租賦。知峯州者言於涿、請罷戍兵、專委由独防遏。於是由独勢孤、不能自立、南詔拓東節度使以書誘之、以甥妻其子、補拓東押牙、由独遂帥其衆臣於南詔。

とあって、耐えられなくなった李由独が南詔国の拓東節度使のもとに走り、拓東節度使はこれを手厚く受け入れている。二年後の咸通元年^④に初めて交趾城を陥したことに関しても、『南蛮伝』中はこの李涿の行為との関連を述べている。

大中時、李涿為安南經略使、苛墨自私、以斗塩一牛、夷人不堪、結南詔將段魯遷陷安南都護府、号白衣没命軍。南詔発朱弩佉直三千助守。

この史料ではそれらの民族と結んだ「南詔の將段魯遷」が主体となって安南都護府を陥した、とされており、南詔王はその親兵である朱弩佉直三千を出してこれを助けているにすぎない点が注目される。ここでは段魯遷が南詔国内でどういふ地位にあったか述べられていないが、後の交趾城占領中に「安南節度使」として交趾城に拠る南詔軍を統率していると

ころから、大軍将クラスの人物と考えてよいであろう。前節で述べたような国内統治体制との関連でいえば、やはり柘東節度、ないし通海都督（通海県）との関連が示唆されることである。

この最初の交州占拠は翌年の六月までには安南都護李鄠によって奪回され、二年七月の邕州（広西壮族自治区南寧市）攻陥を経て、咸通三年（八六二）二月には三度目の攻撃が行われた。この時も唐が内地から大軍を派遣したこともあって、ひと月ほどで兵を引き揚げているが、三月には『蛮書』の著者樊綽が安南経路使蔡襲の命を受けて敵陣に潜入している。樊綽はそこで目にした人物として、賊帥朱道古・柘東判官楊忠義・賊将楊秉忠・楊阿蝕・楊酋盛・楊羌などの名を挙げている。やはりここでも柘東節度に属する人物がみられる。また樊綽の赴いた先は「朱道古營寨」となっている。朱道古は『蛮書』では「賊帥」「草賊」とされるのみであるが、『通鑑』咸通七年十月には「土蛮為南詔郷導者朱道古」とあって、李由独と同様、彼も南詔軍と結んだ周辺民族の首領であることがわかる。『蛮書』巻四には

臣於咸通三年三月八日入賊重圍、因見柘東蛮判官楊忠義背後領八箇蛮持弓槍、……

という記事があり、その朱道古のもとへ楊忠義が柘東節度によって派遣されているという構図を見て取ることができよう。同年の十一月、南詔国は再び五万の軍をもって交州を攻め、翌四年正月にはこれを陥落させて、七年十一月に高駢によって奪還されるまでこれを占拠し続けた。このとき南詔国側の軍を率い、戦闘終了後も二万の兵を領して交趾城に留まっているのは楊思緒という人物である。彼は『通鑑考異』^④によれば、高駢が雲南を与えた牒には「善闡節度使」とされていたという。この善闡節度使とは柘東節度使の別称にほかならない。

咸通四年三月・五年三月にも邕州を攻撃しているが、ここでは具体的な人名は挙がっていない。七年、高駢が交趾城に接近すると、楊思緒に代わって安南節度使となっていた段酋遷への援軍として、善闡節度使楊緝思が送られ、ほかに安南都統范呢些・扶那都統趙諾眉などの名もみえる。^⑤

都護府占領中にも何度か四川方面に兵を送っていることは表2に示したとおりであるが、これらはいずれも、嵩州付近

の辺境における小競合いに留まっていた。しかし高駢によって安南都護府が奪還された後、咸通一〇—一一年（八六九—七〇）には南詔軍は四川南部から成都に迫る。

これに関しては、交州占領中に使者として成都へ赴き、囚われの身となっていた清平官董成が釈放されたことを謝するために、南詔国が再度送った使者である楊酋慶が定辺軍節度使李師望に殺されたことが直接の契機として挙げられている。この遠征には「酋龍乃身自將」（『南蛮伝』中）と明記されており、また成都城下において「驃信以下親立矢石間」（『通鑑』咸通一二年二月）という記事もあるため、親征が行われていることは確かである。「驃信」というのは南詔王の称号であり、『南蛮伝』中によれば尋閣勅の代から自称するようになったといわれる。^⑩

しかしそれと同時に、世隆以外に杜元忠なる人物が大きな役割を果たしている。杜元忠については『南蛮伝』中に「坦綽」と書かれている。坦綽は『南蛮伝』上によれば清平官の別称であり、『通鑑』咸通一二年正月では「用事之臣杜元忠」とされていることから、世隆期の南詔国の第一の重臣と考えてよいものと思われる。西川節度使盧耽がたびたび彼に書信を送っていることから、実質的に行軍を指揮しているのは杜元忠であるという認識は唐側にもあったはずである。『南蛮伝』中には

坦綽杜元忠日夜教酋龍取全蜀。

とされており、これからすればむしろ、杜元忠こそが成都遠征を積極的に推進した首謀者であるといえるかもしれない。

次の乾符元—二年（八七四—七五）。『南蛮伝』中では咸通一四—乾符元年（八七三—八七四）に關しても、『南蛮伝』は「坦綽復寇蜀」と述べ、前回とは違って世隆が同行していることを示す史料は存在しない。『通鑑』乾符元年十二月には

驃信使其坦綽遣節度使牛叢書云……

とあるが、実際には世隆は親征せず、坦綽が遠征軍を率いていたものと考えられる。この遠征における坦綽については、『通鑑』、『南蛮伝』ともに姓名を挙げていないが、前後関係から考えれば杜元忠を指すものとみるのが自然であろう。

ところが『南詔野史』には杜元忠はまったく登場せず、その代わりに牛叢への使者として王保誠・鄼囉・段僊遷らの名が挙げられている。しかも、この中で段僊遷は『通鑑』・『南蛮書』では咸通七年の交州奪還時に既に殺されているのである。ここでも前節で述べたような段氏に関する附会が行われていることがわかる。

第三次の成都攻撃(嶺州付近への入寇は咸通年間も複数回存在する)がふたたび西川節度使に起用された高駢によって撃退され、それと前後して世隆が没すると、南詔国は嶺南西道と劍南西川の両方面に和使を送っている。まず乾符四年(八七七)には陝西段瑳宝が嶺南西道節度使辛讜のもとに送られている。陝西は『南蛮伝』上では「若管記」とされるだけでそれ以上の詳細はわからない。次に乾符五年には清平官・僊望の趙宗政が成都方面に遣わされている。また、やや時代は降るが、中和年間(八八一―四)に唐から公主を迎えるために遣わされた南詔国の使者として宰相趙隆眉・楊奇混・段義宗・布燮楊奇肱^⑧などがあげられている。このうち前の三人は高駢の「南詔の心腹であり、殺すべし」との謀にしたがって殺害され、それが南詔国の衰退を早めたとされている。なお布燮も『南蛮伝』上によれば清平官の別称である。

このように見てくると、登場する人物に偏りがあることは明らかである。すなわち、成都への侵攻に関しては世隆自身はいうまでもないが、王嵯巔、杜元忠と、いわば時の南詔国における最高権力者が直接これにあたっていているといつてよい。また、成都に送られる使者も清平官・布燮といった宰相クラスの人物が目立つ。したがって侵攻そのものの目的を王嵯巔と同様、成都の人口を獲得しようとするものとみなすにしても、あるいは唐に対する示威行動と考えるにしても、蒙氏を中心とする南詔国の中央政権がこれを主導しているには違いない。

これに対して、交州方面とのかかわりで登場するのは柘東(善蘭)節度、およびそれに関連する人物がほとんどであり、南詔国中央から派遣されたときみなされるものは少ない。しかも、交州攻撃に際して登場する人物には圧倒的に楊姓・段姓を持つものが多いのである。この楊氏・段氏は西洱河蛮系の有力氏族の代表的なものであり、既に触れたように南詔国滅亡後の後継政権(楊氏の大義寧国・段氏の大理国)を建設する氏族でもある。また、従来の研究における南詔国後半期におけ

る白蛮系有力氏族の台頭とは、おもにこの楊氏・段氏が昆明盆地を中心とする雲南東部で在地勢力化したということを意味するものであった。それゆえ、交州侵攻を彼らの主導によるものと考えらるならば、武内氏の述べるような、「安南侵攻の直接的理由として柘東城を根拠地とする楊氏勢力がヴェトナム北部への進出を企図したのではないか」との見方が出てくるのも当然であろう。

しかし、ここでもまた前節の後半で述べたような史料の問題がある。確かに『南詔野史』においては大理寧国の創建者楊于貞、および大理国の創建者段思平が即位前にそれぞれ東川節度使、通海節度使であった、とされている。しかしここで問題にしている時代に関しては、右に挙げた楊思緯（柘東節度使）・楊忠義（柘東判官）・楊緝思（善闡節度使）・段僉遷（安南節度使）などの人名・官名以外に、武内氏のいうように楊氏が柘東城を世襲的に領有し、これを中心として南詔国内に支配をおよぼしていた^⑤ということに対する確たる論拠が見あたらないのである。後半期における「有力氏族の台頭」がかならずしも自明のこととはいえない以上、仮にこれらの人名を楊氏・段氏台頭の根拠とするのであれば、少なくとも交州侵攻に関しては別の角度からの論証が必要とされるだろう。

次項では、交州侵攻に関してさらに詳しい検討を進める。その際、周辺民族の動向に注目したい。また、昆明盆地とヴェトナム北部との歴史的なつながりにも触れる必要がある。

（二）「安南侵攻」の背景

ヴェトナム北部への軍事侵攻に関して、柘東節度に関連する人物が史料に多く登場すること自体は、さほど理解が困難なわけではない。それは雲南地方からのルートとの相違によるものである。四川方面へのルートには何通りか考えられるが、九世紀後半の軍事遠征ではいずれも清溪関路が用いられている。これは大理盆地から弄棟節度（姚安県）を経て北上し、会川都督（四川省会理）・嶺州を経由して金沙江の支流である大渡水（大金川）を渡り、成都へ至るものである。いっぽう交州へ

出るには歩頭路、つまり昆明盆地から通海を経て紅河に至り、これに沿って下っていくルートが使われた。^⑥史料に記されたルートに従う限り、大理盆地からヴェトナム北部へ至るにはかならず柘東節度を經由する必要があるし、歩頭路は柘東節度・通海都督の管轄するルートであり、それを用いる軍事遠征に柘東節度に関連する人物が表れるのは当然といえる。したがって問題は、彼らがどのように交州侵攻に関与しているかということであり、なぜ南詔王よりもむしろ彼らが表に出てくるのかということである。前項でみた段酋遷による攻撃の例からもわかるように、交州侵攻に対する南詔王の関与はきわめて消極的であるといわざるをえないのである。

咸通初年の南詔国の侵攻がもともと安南都護李涿の周辺民族に対する横暴を契機とすることはすでに述べた。『蛮書』巻四にはこれに関連する民族の例が二つ挙げられている。一方は先に引いた『通鑑』の記事とほぼ重複しており、唐の辺境防衛に協力していた七縮洞蛮（『蛮書』では桃花人と呼ばれる）の去就に関するものである。もう一方の記事を以下に示す。これも内容的には先に引いた段酋遷に関する『南蛮伝』中の記事と関連する。

崇麗蛮、去安南管内林西原十二日程。溪洞而居、俗養牛馬。比年与漠博易。自大中八年经略使苛暴、令人将往林西原博牛馬、每一頭匹只許塩一斗。因此隔絶、不将牛馬來。

ここに見える林西原については、方国瑜氏が考証を加えている。^⑦『蛮書』巻四の蠻蛮条においては林西原から賈勇歩までが二十二日とされており、同書巻一の路程によると交州から同じ賈勇歩まで二十五日となっている。賈勇歩は交州から紅河を遡上するルートの上陸地点である。具体的な位置比定は望むべくもないが、林西原がこのルート上にあることはほぼ確かであり、交州から三日の地点、つまり『蛮書』巻一において交州から二日とされる峯州と、そこからさらに二日の登州との間に位置することになる。なお『通鑑』では李由独の七縮洞も「其旁」とされている。

『蛮書』巻一によると、李涿の行為によって周辺民族が南詔国のもとへ走る以前は、賈勇歩までが安南都護府の勢力圏であったという。しかし李由独の協力していた防冬兵戎が真州・登州の界上で行われていたことから考えて、実際に支配

力の及ぶ範囲はその辺りまでと考えてよいであろう。崇魔蛮は林西原からさらに十二日程雲南寄りに居住していたのであるから、南詔国と唐の緩衝地帯の任人ということになる。

彼らは唐と牛馬の交易を行っており、そのために林西原まで出てきていることがわかる。李涿は強奪に近いやり方で崇魔蛮から牛馬を買い付けたため、『南蛮伝』中によれば、彼らがまず段酋遷を交州攻撃に誘い入れたことになっていた。彼らが単にその住地において牛馬を飼育するだけでなく、交易ルートを通して南詔国と連絡を持っていたことをうかがうことができよう。雲南地方を含めた東南アジアの山地部における交易活動は近代に至るまで、次々リレー式に担い手が交替する中継交易の形を取るのが普通であったといわれる。この崇魔蛮も、雲南地方と紅河デルタとを結ぶルート上の交易の民としての性格をもつとみなすことができる。また七縮洞蛮(桃花人)に関しても、彼らの住地である林西原が交易の場として機能している以上、これと無関係とはいえないだろう。

李涿の行為を契機に南詔国が安南都護府を攻撃したことの背景にはこのような、朝貢遣使を中心とする四川ルートとは形態を異にする交易活動の存在があったのである。そして柘東節度は李涿らによって圧迫された諸民族を傘下に納めることによって、ヴェトナム北部へ勢力を拡大しているということが出来る。

このような昆明盆地を中心としてヴェトナム北部にまで伸びる勢力を考えると、念頭に浮かべざるをえないのは南詔国による雲南統一以前の爨氏の存在である。

爨氏については皮羅閣の時代にこれが滅びた後の昆明盆地を手中に収めたということ以外、筆者はあまり触れてこなかった。爨氏は『華陽国志』南中志に既に南中の大姓として挙げられており、中原王朝の支配力が後退した六朝期には、昆明盆地において寧州刺史を自称していたことが『爨龍顏碑』^①等からわかる。彼らの勢力は昆明盆地を中心としていたが、決してそれに限定されるものではなかった。『華陽国志』では爨深が交州刺史に、『晋書』^②では爨谷が交趾太守に任じられているし、唐代にも『曲江集』には「勅安南首領爨仁哲書」が収録されており、そこには安南首領歸州刺史爨仁哲のほか、

黎州刺史爨曾などの名が挙がっている。爨氏の勢力圏は昆明盆地から交易ルートに沿ってかなり南方、現在のヴェトナム北部近くまで達していたのである。

大理盆地と昆明盆地の両者を手中に収めた政権は南詔国以前にまったく例がない。漢代の滇国と昆明（ないし哀牢）、六朝期の爨氏と白子国^②などの例にみるように、雲南地方にはつねに東西二つの中心があった。それだけに、唐の歩頭路開発に伴う混乱に乗じて爨氏を滅ぼした蒙氏にとって、昆明盆地の経営が成功するかどうかは南詔国が雲南全域を代表する政権に成長するうえで非常に重要なポイントであった。歩頭路および戎州（四川省宜賓市）を經由して成都に至る石門路は、元来昆明盆地と外世界を結びつけるルートであり、大理盆地とは直接の関連をもたない。章仇兼瓊による歩頭路開通計画においても、大理盆地は通過点でさえなかったのである。したがって南詔国がこれらのルートを把握するためには、柘東城に昆明盆地のみならず、爨氏の旧勢力圏全体を統轄する機能を持たせる必要があった。柘東城が南詔国の副都と呼ばれるのはまさにこのためであるといつてよい。だからこそ築城当初は閣羅鳳の長子鳳伽異がこれに当たったのであり、以後はそれが最有力氏族である楊氏や段氏に引き継がれていったのである。

楊氏や段氏が昆明盆地周辺において在地勢力化したとすれば、それはこのような柘東城の重要性ゆえであろうし、爨氏の時代までの雲南地方の東西二分傾向もこれを助長したにちがいない。南詔国と唐との交渉が大理盆地―清溪関路―成都というルートを通じて円滑に行われている時期には、柘東節度の活動は表に出てこなかった。しかしその間にも、彼らは旧爨氏の勢力圏を継承する形で成長していったものと考えられる。

九世紀に入ると交州およびその東の邕州における周辺民族の動きが急激に活発になる。元和十四年（八一九）には安南賊楊清なる者が安南都護府を陥して都護李象古を殺害しているし、^③その後も西原蛮・黄洞蛮と呼ばれる邕州周辺の民族がしばしばこの方面で反乱を起こしている。南詔軍が八四六年にすでに安南都護府を攻撃していることはすでに述べたが、それはおそらく、このような周辺民族の反乱と強い関連性を持つものであろう。事実、『南蛮伝』下の西原蛮条には彼らが

「南詔と結んで」これを助けた、との記載がある。南詔軍による交州攻撃の際、嶺南節度使韋宙が二度にわたって「蛮寇必向邕州」との上奏を行っていることからも、右の記述はこの時期に関するものであろう。交州攻撃の動機が七綰洞蛮・崇麤蛮に対する李涿の行為だけに限られないことをこの記事は示している。

ヴェトナム北部への遠征を柘東節度が主導することは、その管轄範囲からも理解できる。しかし仮に楊氏・段氏がそれまでに纓氏の勢力圏を引き継ぐことに成功していたとするなら、世隆の即位直後に唐との関係が決裂し、大理盆地が不安定な状況におちいったことを機に、彼らがみずからの意志でこれを行ったという可能性も考慮せねばならない。

成都および交州における対外遠征の主導者の相違は、以上のような観点からとらえることができる。いいかえれば、雲南地方に蒙氏を中心とする大理盆地と、楊氏・段氏を中心とする昆明盆地という二つの中心が再び形成されつつあったのである。

南詔国の成都への侵攻は、最終的には世隆の死によって入城を果たさずに終わり、結局王嵯巔の時のように成都城内の人間を奪うことはできなかった。その結果生じたものは、昆明盆地の相対的な地位の上昇であったと考えられる。唐への使者が嶺南西道節度使へ送られるようになったのもこれを示すものであろうし、王位を継いだ隆舜(諡)は、善闡城において唐の使者徐雲虔と会見しているのである^③。この時期に至って、実質的に楊氏を代表とする昆明盆地の勢力が南詔国を左右するようになったのであり、その意味で武内氏の描く南詔国後期の像をそこに当てはめることができる。

しかし、いかに宗教的権威を身にまとおうとも、蒙氏が南詔国であることの必然性は既に失われていた。したがって、次の舜化貞の時代に王位が篡奪されることは避けることができなかつたといえることができる^④。

① 静海軍節度使は交趾城奪還後設置され、高駢が初代の節度使となつた。(『通鑑』咸通七年十一月)。

② 武内前掲論文、九六頁。

③ 『新唐書』卷八 宣宗本紀。

④ 史料中には「拓東」につくるが、本文は『蛮書』にしたがって「柘東」に統一する。

⑤ 次に引用する『南蛮伝』の記事によれば大中末の事件のように述べられているが、『通鑑考異』(咸通元年二月)の考証にしたがい、咸通元

年とする。

- ⑥ 『南蛮伝』上「王親兵曰朱弩佐苴。」
- ⑦ 『蛮書』卷四の蠻蛮条の末尾および巻末に関係記事がある。
- ⑧ 咸通四年正月の記事に対する考異。ただし現在『全唐文』に収録されている高駢「回雲南牒」には楊思緒の名はない。
- ⑨ 『通鑑』咸通七年六月。
- ⑩ 『南蛮伝』中「子尋閣勸立、或曰夢溪、自称『驃信』、夷語君也。」
- ⑪ 『南蛮伝』上「官曰垣緯・曰布燮・曰久贊、謂之清平官、所以決国事轻重、猶唐宰相也。」
- ⑫ 『南蛮伝』中。
- ⑬ 『通鑑』中和三年七月。
- ⑭ 本節註②参照。
- ⑮ 武内前掲論文、九八頁。
- ⑯ 歩頭の位置については建水・元江・紅河（鼎）など諸説あるが、いずれも紅河からの上陸地点であることには違いなく、本稿の論旨には影響を及ぼさないので一切触れない。
- ⑰ 方国瑜「与交通有関之林西原地名」（『中国西南歴史地理考釈』上、中華書局、一九八七年、五八七―五八八頁）。
- ⑱ 栗原悟「清末民国期の雲南における交易圏と輸送網」（『東洋史研究』五〇―一、一九九一年、二六―一四九頁）。

おわりに

以上三節に分けて、再帰唐以後の南詔国後半期に関するいくつかの問題について検討した。前稿および本稿において、筆者は南詔国の歴史を対外関係を中心にとらえてきた。それは決して、雲南地方の民族史からいわゆる冊封体制論へ逆行することを意図したものではない。南詔国にとって、外世界との関係、なかんずく八世紀後半の唐―吐蕃関係とのかかわ

- ⑲ 「宋故龍驤將軍護鎮蛮校尉寧州刺史印都異爨侯使君之碑」（『滇南古金石録』所収）。
- ⑳ 『華陽国志』卷九 李特雄期寿勢志。
- ㉑ 『晋書』卷五七 陶瑱伝。
- ㉒ 四部叢刊本卷一。
- ㉓ 白子国は南詔国の成立以前に張氏が建てた政権であると言われるが、唐宋代の中国史料にはまったく記録がない。しかし十世紀初頭の南詔国側史料である『南詔国卷』にその名があることから、その存在を否定することはできないであろう。林超民「白子国考」（『南詔文化論』雲南人民出版社、一九九一年、一〇四―一六頁）、藤沢前掲書、一五―一四四頁。
- ㉔ 『南蛮伝』上。
- ㉕ 『蛮書』卷六、『南詔德化碑』。
- ㉖ 『通鑑』元和十四年一〇月。
- ㉗ 『通鑑』咸通三年十一月、四年八月。
- ㉘ 『通鑑』乾符六年二月。
- ㉙ 纂寧自体は『通鑑』など宋代の史書には記録されていない。『南詔野史』によれば彝化貞は漢人系（異牟尋代の清平官鄒回の子孫）の鄒買嗣によって殺害されたという。

りが非常に重要な要素であったことは否定できないし、それに対してこれまで正当な評価が与えられてこなかったことも事実なのである。

第三節でも述べたように、南詔国の成立以前には雲南地方にはつねに東西の二つの中心が存在した。最近の考古学研究によれば、石寨山遺跡に代表される滇東文化圏と、洱海南部の祥雲などを中心とする滇西文化圏が存在していたとされる。そしてさらに、前者はヴェトナム北部のドンソン文化との類似性が強いのに対し、後者は青銅器の形態からチャオプラヤー川河口などへの進出が認められるという。四川地方へ至るルートの相違を考えれば、この両者は相互にほとんど重なることのない経路によって中国と東南アジア世界を結んでいたのであり、これが両者にまたがる政権の成立を困難にしていた要因であるといえるだろう。繰り返しになるが、そこに唐が介入することによって初めて、南詔国は大理盆地だけでなく昆明盆地をも領有し、雲南を代表する政権となることが可能になったのである。

その成立の経過から、南詔国が対外関係に依存する側面を持つことは避けられなかった。使い古された言葉でいうなら、結局のところ蒙氏は、「世界帝国」としての唐の存在、およびそれを中心とする国際関係を前提とする性格から脱却することができなかったということができるだろう。そのことは世隆死後の状況からも読み取れるし、南詔国が唐の衰退と軌を一にして九〇二年に崩壊することが、なによりも雄弁にそれを物語っている。

南詔国が鄭氏によって篡奪された後、趙氏・楊氏の政権を経て段氏の大理国に至ると、四川方面では宋が大渡河を境界として防衛体制を固め、それ以南にはほとんど興味を示さなかった^①。四川南部、唐代の濠州周辺に存在した東蛮と呼ばれるグループもその勢力を確立してゆく。これは現代の彝族に連なるものと考えてよいだろう。一方ヴェトナム北部ではいふまでもなく、固有の政権が成立しはじめる。さらに視野を広げれば、それは中国をめぐる国際関係が中国西部から北アジア、および広州を窓口とする南海交易に大きく重心を移していく時期に当たっている。大理国はその中であって、国際的にはほとんど孤立の状態にあり、南詔国とはまったく違う条件に置かれているといっても過言ではない。

しかし見方を変えれば、大理国は外世界の情勢とは一応の距離をおいて、雲南地方に新たな秩序を形成する機会を与えられたということもできるのである。武内氏の所論によれば、大理国の歴史は基本的に南詔国末期の昆明盆地の優位性をさらに高めながら、これと大理盆地との関係を軸に動いているように思われる。^③しかし同時に、南詔国時代にはほとんど問題にならなかった東北部の集団（三十七蛮部）が大きな働きをしていることも指摘されている。このような中から大理盆地の白族を中心として、モンゴル軍による大理国征服以後、現代の少数民族にまでつながる雲南地方諸民族の状況が形成されていくわけであり、そこには唐・吐蕃との関係を軸とする南詔国史に対するのは自ずと違った視点が必要であろう。

- ① 『統資治通鑑長編』卷二六七の註に引く「雲南買馬記」などを見る
と四川南部を通じた雲南地方との交流がほとんど行われていないこと、
地理・民族などに関する知識が大幅に後退していることがわかる。
- ② 『宋史』卷四九六蛮夷伝四 黎州諸蛮。
③ 武内前掲論文、九八一—〇二頁。

（京都大学研修員

On the International Affairs and Administrative
Structure in the Latter Half of the Nanzhao Kingdom 南詔国

by

HAYASHI Kenichiro

The purpose of this paper is to examine the relations of the Nanzhao kingdom with Tang China in the latter half of the 9th century, especially, the motives and historical surroundings of Nanzhao's invasion of Sichuan and Annan in this period.

In the Nanzhao kingdom, the ruling clans including the royal family formed a kind of coalition government. It was the close relationship with Tang China that supported the predominance of the Nanzhao king 南詔王 in the form of the profits from the tribute-trade and those of the combined operations against Tufan 吐蕃 (Tibet). Tang China had to give serious consideration to its relations with Nanzhao for the sake of being able to restrain Tufan. In the middle of the 9th century however, the decline of Tufan made these relations meaningless. Nanzhao invaded the territory of Tang China. This was as well a protest against Tang China which had refused to preserve the alliance as it was a demonstration of power by the Nanzhao king, who presented himself as an Emperor and intended to form an equal relationship with Tang China. On the other hand, the invasion of Annan shows the growth of the dominant clan in the Kunming basin 昆明盆地. After the military expeditions had ended at the close of the 9th century, the authority of the Nanzhao king declined and the social structure in the Yunnan region was reorganized under the main influence of forces in the Kunming basin.